望んだ非日常（仮）

夕凧水榭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

望んだ非日常（仮）

【Nコード】

N9525S

【作者名】

夕風水榭

【あらすじ】

繰り返される日常に退屈していた時、柚芽は幼馴染みの榴希と覚えのない道を見つけた。

何か起こらないかという好奇心からその道を進む2人だったが、どこまでも続くその道。

先に見える光の元へ辿り着けば、光は2人を飲み込み、意識を手放す。

次に目が覚めた時、そこは見知らぬ土地だった。

0・プロローグ

人は毎日同じ日常を繰り返す。

朝起きて、学校や仕事に行き、帰って来て寝て、そしてまた朝が来る。

多少何かしら違う出来事があったとしても、基本は変わりない。

そんな平凡過ぎる毎日に退屈していた。

物語にあるような非日常的な出来事を羨んだこともある。

けれど、所詮そんな出来事は物語の中だけのことであって、現実で起こりうることはない。

そう、思っていた。

繰り返される日常。

今日も朝起きて、学校へ行き、そして帰宅する。

帰れば母が作ってくれた夕食を食べて、風呂に入り、宿題をして寝るのだから。

ツマラナイ。

そう思う。

だが、それでも学校では友達といれば一緒になって笑ったり、遊びに行ったりもする。

それはそれで楽しい。

けれど、それだけでは物足りない。

平凡過ぎる毎日に何か刺激を求めていた。

「柚芽！」

名前を呼ばれて振り返る。

そこには幼馴染みがいて、柚芽は少し驚いたように彼を見た。

「榴希、どうしたの？」

自分より幾分も高い彼を見上げ柚芽が問いかけると、榴希はめんどくさそうに1冊のノートを渡してきた。

何だと思いながらも受け取ればノートの表紙には「2 - B 折原柚芽」と書かれている。

自分のノートだと理解するがそれを何故クラスも違う榴希が持っているのが分からない。

「お前んとこの担任が「峰崎、お前折原と幼馴染みだったよな。これ、返却し忘れててな。悪いが届けてやってくれないか？」って。

「たく、幼馴染みだからって、今は住んでる方向逆だったの」

小学6年までは家も隣同士でよく交流があつたが、小学校を卒業した頃、柚芽の父親の仕事の都合で引っ越した。

中学を卒業と同時にまた戻ってくる事が出来たのだが、今度は榴希の家とは反対方向だ。

それでも面倒そうにしながらもきちんと届けに来る辺り人が良いのだろう。

柚芽はくすりと笑うと、ノートを鞆の中にしまった。

「久々に家寄ってく？」

「ん？そうだな……」

考えるような仕草を見せるが、榴希が答えを出すよりも早く、柚芽は「あれ？」と不思議そうな声を出した。

見てみれば、柚芽の視線は既に榴希にはなく、別の方向を向いている。

榴希も釣られたようにそちらを見るが、そこには細い道が1本あるだけだ。

何らおかしいところはない。

「どうした？」

「あんな道、こんなところにあっただけ？」

「は？」

「なかつたと思うんだけど……」

首を傾げる柚芽に榴希はもう1度その細い道を見る。

「こつちにはあんま来ねえからな……けど、いきなり道が増えるなんてことねえだろ。気のせいじゃね？」

「そう、なのかな……」

そうは言うが納得出来ていない様子。

よく考えてみてもやはりその道には覚えがなかった。

毎日、登下校で通る道なのに、その道は記憶の片隅にもない。

柚芽は正直、その道を行って見たかった。

覚えのないその道は、行けば何かが起こるのではないかという期待がある。

例え期待したところで、この現実では何も起こらず、行けば向こう側の道に出てがっかりするだけだろう。

けれど、例えその一時だけのわくわくやドキドキといった感情でも、この退屈な毎日には充分かもしれない。

「おい、柚芽？」

怪訝な表情で柚芽を見る榴希だが、柚芽はじっとその細い道を見つめたままだ。

その瞳は好奇心で満ち溢れていた。

そんな柚芽に榴希は呆れたように溜息をつき、歩き出す。

帰ろうと足を向けたのではなく、向かったのはその細い道だ。

「榴希？」

「行きてえんだろ？どうせ何もねえんだから、1人で行っても空しいだけだろ。だったらついてってやるよ」

彼は柚芽を笑わなかった。

何度も柚芽が望むように呟く変化。

退屈な日常を覆すような何かが起これば良いと望む柚芽に、呆れはしても、笑いはしなかった。

榴希もどこかでこの繰り返される日常に飽きていたのかもしれない。榴希がその道に入って、袖芽も慌てて後を追いかける。細い道で両側には家が立ち、少々暗いが道の向こうからは光が見える。

そこを目指して歩くが、すぐ異変に気付いた。

「ねえ、榴希。何か、おかしくない……？」

「ああ」

短い返事。

だが、彼も混乱しているのだろうとすぐに察することが出来た。

2人がこの道に入ってから既に10分が過ぎていた。

いくら歩いても道の先には着かず、光だけが見える。

よくは分からないがこのままでは埒が明かない。

一旦戻った方が良さだろうか。

そう思つて振り返つて目にしたものに目を見開いた。

「る、榴希！」

「何だ？ どうし　！？」

振り返つたそこは壁だった。

確かにそこから来たはずなのに、そこに道はなく、綺麗に壁で塞がれていた。

「な、何で……」

怯えたような声が榴希の耳に届いた。

榴希もこの有り得ない状況に戸惑いが隠せなかった。

「ど、どうしよう……？」

望んでいた非日常。

だが、いざそれを目の前にすればやはり戸惑いは隠せない。

どんなに望んでいたとしても、それは決して起こりうることはないことだから望むのだ。

だからそんな有り得ない出来事が目の前で起これば恐怖するし、戸惑う。

それが感情を持つ人間なのだから仕方ないことだろう。

不安そうに榴希を見上げる柚芽の手を取り、榴希は歩き出した。

「る、榴希……？」

「後ろが塞がってる以上、進むしかねえからな。……大丈夫だ。此処を抜ければいつも通りの日常だ」

「う、うん……」

繋がれた手の温もりに少しだけホツとして、引かれるようにして歩く。

振り返れば2人の後にぴったりとくっつくように壁が迫っていて、暫くすればもう振り返ることはなく、ただ前を目指した。

「近くなってきたな」

ずっと遠くに見えていた光が近づく。

それはこの道の終わりを示していて、そこを抜ければ知った風景があるのだろうと期待する。

足は自然と早くなり、より一層光へと近づいた。

此処を抜ければいつも通りの……。

非日常を望んでいたはずがいつも通りを望むのがおかしくて、何だか笑える。

だが、その光に近づけば近づく程、いつも通りからは遠ざかって行く、そんな予感がした。

やがて光はすぐ目の前というところまで近づいた。

「……ごめん、榴希」

「柚芽？」

「あたしが変なこと望んだから、榴希まで訳分かんないことに巻き込んだじゃった……」

光の先は何も見えない。

細い道の先は本来あるはずの道路や家ではなく、どこまでも続く光の道。

両側の壁は気づけば空が見えない程に高く、後ろは壁。

退き返すことは出来ない。

進むしかないのだ。

「……ばーか」

その声に見上げれば、榴希は笑っていた。

「お前の行動に巻き込まれんのは今に始まったことじゃねえだろうが」

昔から好奇心の強い柚芽に付き合っでは迷子になったこともあれば、犬に追いかけられたこともある。

それは幼い頃の話だが、2人の付き合いの分だけ、いろいろあり、今回もその1つ。

もちろん恐怖はあるが、柚芽を責めるつもりなど毛頭ない。

それに、この道に入ったのは榴希の意志だ。

「だから気にすんな」

「榴希……」

「……行くか。手、離すなよ」

繋いだ手に力を籠める。

2人が1歩、光の中へ足を踏み入れれば、たちまち後ろや両側にあつた壁は光に？き消される。

そして、その光は柚芽たちの体までものみ込んでいった。

「る、榴希!？」

「柚芽!」

声は聞こえるがお互いの姿は既に見えない。

手に感じる相手の温もりだけが、まだお互いが近くにいることを現していた。

せめてこの手だけは離すまいと力を籠めるが、その手の感触は瞬間にして消える。

それと同時に、突如柚芽は意識を手放した。

1・異世界(1)

鼻を刺すような嫌な臭いで柚芽は目を覚ました。

「ひ…っ」

起き上がり、視界に入った光景に柚芽は小さな悲鳴を上げた。目の前に広がるのは赤い血とたくさんの死体。

2種類の鎧を身に纏った男たちが倒れ、この規模からして戦争でもあったのだろうかと思うが、今の柚芽にはそんなこと考えている余裕はない。

腰を抜かしながら後ずされば、手がヌルツとしたものに触れたのに気付いて手を目の前まで持つてくれればそれは赤く染まっていた。

「や、やだ…っ、な、何よ…これ……」

辺りに充満する臭いに吐きそうになりながらもそれをグツと耐える。目の前の光景が信じられない。

「だ、誰か…！誰か生きてる人はいませんか…！？」
生きている人はいないか。

震える足で立ち上がり叫ぶがそれに答える声はない。

「そ、そうだ…る、榴希…！どこにいるの…！？」

あの光の中で榴希の手の感触を失った。

はぐれてしまったのだろうか。

「こんな…やだよ…やだよ！」

逃げるようにその場から走り出す。

だが、不意に呻き声が聞こえて弾かれたように振り返った。

「だ、誰か…いるの…？」

怯えたように声を出すが、返って来たのは小さな呻き声。

そっと死体の中を歩けば、呻き声をあげる男性の姿を見つけた。

「だ、大丈夫ですか！？」

慌てて駆け寄れば、背中に斬られたような酷い傷跡があった。

「う……」

男は薄く開いた目を柚芽に向ける。

その瞬間、起き上がり手に握っていた剣先を柚芽に向けた。

刃先は柚芽の首に当たり、少しの血が流れ、柚芽は怯えたように後ずさった。

「レイディアの……者が……」

「れ……レイ、ディア……?」

レイディアとは何だろうか。

恐怖してるせいで上手く思考が働かないが、この状況からして敵と思われているのだろうということだけは分かった。

「あ、あたしは……貴方の敵じゃ、あ……ありません」

「敵……じゃ、な、い……」

「あっ」

震える声で伝えれば男は気が抜けたように再び倒れた。

「ど、どうしよ……」

おろおろとしながら男を軽く揺すってみるが、男は気を失い返事をしない。

どうしたものかと考えるが、このまま放っておけばこの男は確実に死ぬだろう。

それが分かかっていて放っておくことは出来ないが、先程剣を向けられこの男に対する恐怖がある。

敵と勘違いしてのことなのだろうと思うが、相手は剣を持っていて、それで人を斬ったのだろうと考えれば、柚芽の常識では有り得ない出来事に、この男を助けても良いのだろうかと思う。

けれど、この見知らぬ場所で1人になるのはとても不安で、やはり死ぬと分かって放っておけない。

柚芽は男の腕を肩に回して立ち上がるとゆっくりと歩き出す。

自分よりも体の大きい男性の体を女の柚芽が運ぶには辛く、引きずるようになってしまう。

暫く歩けば視界の先に森が見え、宛てもなくその中へ入れば小さな小屋があつた。

中を覗けばそこに人の気配はなく、荒らされた室内があつたが、どうやら何とか使えそうだ。

窓のすぐ側にあつたベッドへ男を寝かせ、ガラスの割れた棚から薬やら包帯といったものを探す。

あまりこういった知識はないが、何もしないよりはマシだろう。

慣れない手つきで最後に包帯を巻いて、息をついた。

「大丈夫かな…この人……」

辛そうにしているが、これ以上出来ることはなく、見ていることしか出来ない。

何だかそんな自分が不甲斐無くて、けれど、そんなにも心配する相手が自分に剣を突き付けた相手なのだから何だかおかしい気もする。そう考えて、首が少し痛いのに気付いて手をやれば、血は既に止まっているが固まった血が手についた。

「忘れてた……」

この痛みより、男をどうにかせねばという気持ちの方が強くて忘れていた。

だが思い出せば痛くて、割れた鏡で何とか首元を映しながら手当てした。

「……これから…どうしたら良いんだろう」

男が眠るベッドの横へ椅子を引いて座り、ポツリと呟く。

窓の外を覗けばそこは見知らぬ場所で、目の前で眠る男の格好も見慣れないもので。

それに、柚芽のいた場所で剣なんて持っている人間がそうそういるものではないし、あんなたくさん死体なんて一生かかっても目にすることはなかっただろう。

(此処は、あたしの世界じゃない……?)

考えて怖くなった。

別の世界なんて現実的に考えて有り得る訳がないが、自分のこの目

ではつきりと自分の世界とは違うその光景を見たのだ。
夢かとも思った。

けれど、寝た記憶などなく、覚えているのは榴希と共に通ったあの
不思議な細い道と眩いほどの光。

あれが異世界への入口だとでもいうのだろうか。

「榴希……………」

行方知れずの幼馴染みの名を不安げに呟く。

此処は柚芽のいた平和な世界じゃない。

物語の中のような武器を持って戦う世界。

そこには死があり、それを思えば恐ろしくなった。

「……………な、何怯えてんの、あたし……………自分で望んでたことじゃない

……………」

退屈な日々に変化をもたらす何か。

起こりえないと分かっていたからこそ望んでいて、そして叶った。

「大丈夫…何とか、なる…よね……………それに、榴希だって探さなきゃ」

巻き込んでしまった彼を探さなくてはならない。

今の状況は全て柚芽の自業自得で、怯えている場合ではないのだ。

危険かもしれないこの世界で、今榴希がどうしているのか。

それを考えて、今度は酷く不安になった。

1・異世界(2)

柚芽が負傷した男を連れ、森の小屋に来てからどれくらいの間が経っただろうか。

ベッドに寝ていた男が小さな呻き声を上げた。

その声に窓から外を見ていた柚芽はハツとして男の側に駆け寄った。薄っすらと開いた瞼から覗く目が柚芽を捉える。

「だ、大丈夫ですか……？」

「お、れは……」

掠れた声で呟くと男はハツとしたように勢いよく体を起こした。

だが、背中の傷の痛みで男は呻く。

柚芽は慌てて男の体を支える。

「す、すまない……」

「い、いえ……。大丈夫……。じゃないですよ。すみません。あたし、大した治療も出来なくて……」

「いや、君に助けてもらわなければ俺は死んでいただろう」

「そんな……。ところで、あの……。お聞きしたいことがあるんですが良いですか？」

「聞きたいこと？」

「あ！別にもう少し怪我がよくなってからでも良いんです。ただ、あたし、何も分からなくて……」

此処がどこなのか。

そして、何故あんなにもたくさんの死体があったのか。

柚芽が知る常識からかけ離れた現実。

いつも頼りにしていた榴希とも離れ、不安でたまらない。

そんな不安そうに揺れる柚芽の瞳を見て、男は柚芽の頭に優しく手を置いた。

「動かなければ大した痛みもない。俺で分かることなら何でも教えよう」

「あ、ありがとう！」

不安が取り払われたように安堵の表情を浮かべる柚芽に男も笑みを浮かべる。

そして思い出したように「その前に」と口を開く。

「君の名前を覚えてもらって良いか？俺はアデイル・セラフィム。アデイルで良いよ」

「折原柚芽です」

「オリハラ？変わった名前だな……」

「あ、いえ。折原は苗字……ファミリーネームで、柚芽が名前です」
「なるほど。じゃあ、ユメ。君は何が聞きたいんだ？」

「あの……この、世界について……」

「え？」

アデイルが不思議がるのも無理はない。

普通、世界について尋ねたりはしないのだから。

だが、柚芽が此処を自分がいた世界とは違う世界だという確信を持ったからこそ出た質問だった。

「信じてもらえないかもしれませんが……あたしは、この世界の人間じゃありません」

柚芽の言葉を聞いたアデイルは当然驚きを隠せなかった。

頭がおかしいとか、妄想癖があるとか、考えられることはある。

だが、必死な柚芽な表情を見て、やがてアデイルは柚芽の言葉を信じるという結論に辿り着いた。

「そうか……。見知らぬ土地に1人というのは心細かっただろう」

「信じて、くれるの……？」

「君が嘘をついているとは思えなかったからな」

優しいその声に、今まで我慢して来たものが溢れて来る。

心細くて、不安で。

けれど泣いてもどうにもならないから泣くことすら出来ず。

それでもアデイルの言葉に涙を流さずにはいられなかった。

「あ、あたし、こんなことになるなんて思わなかった……！榴希まで巻き込んで！どうしよう……榴希、あたしのせいで何かあったら……っ」

「ユメ……」

「異世界なんて……っ」

自分が望んだ非日常。

叶わないと分かっているからこそ望むこと。

それがどういふ訳か叶い、それに大事な幼馴染みを巻き込んでしまった。

自分の好奇心によって巻き込み逸れてしまった榴希。

柚芽の知る常識とは違う、戦いのある世界。

もしも榴希が危険な目に遭っていたら。

自分の不安よりもそちらの方が心配だった。

そうして暫く泣き続ける柚芽の背をアデイルは優しく撫で続けた。

「落ち着いたか？」

漸く涙が止まった頃、アデイルが気遣うように尋ねた。

だが、柚芽としては出会ったばかりの男の胸を借りて泣き続けた事実
実に恥ずかしくて顔があげれなかった。

「ユメ……？」

「あ……っと、だ、大丈夫、です……」

アデイルから離れて小さく呟く。

けれど、顔は俯いたまま視線を合わせようとしないう芽にアディルは訝しげに見る。

そしてそんなう芽の態度に違う方向へ勘違いしてしまった。

「ユメ、まだ辛いなら無理に泣きやまなくて良い」

「え？あ、ち、違うんです。その……」

「？」

「出会ったばかりの男の人の胸借りて泣くなんて、その……恥ずかしくて……」

顔を上げるが、頬を赤く染めたう芽はアディルと視線を合わせようとはしない。

ぽかんとした様子でう芽を見ていたアディルだったが、途端に笑いだした。

「はは、はははっ！面白いな、お前」

笑ったせいで背中への傷が痛んだのか、少し表情を歪めたが、それでもアディルは笑った。

う芽としては笑われたことに怒れば良いのか、傷を心配すれば良いのか分からず複雑な心境だ。

「わ、笑わないで下さい……」

「すまない。だが、こんなに笑ったのは久しぶりだ」

「え？」

「今は我々の国、ユクリールと隣国レイディアとは戦争中だからな。戦場に出る俺たち兵には今笑っている余裕などなかった」

「戦、争……」

戦争を知らないわけではない。

けれど、自身が平和な環境で育った為に、戦争というものを理解はしていても実感が沸かなかつた。

「ああ。だが、この戦争は我々の負けだ……」

「負け、たの……？」

「俺たちが守っていた城を落とされ、王も亡くなられた。俺たちが弱いばかりに……っ」

「アデイル……」

グツと手を握り締め、爪が食い込む。

掌を傷つけて血が滲み、柚芽はハツとして消毒液と包帯の入った箱を部屋にあった棚から取る。

アデイルの手を取り、そつと指を開いていく。

赤く染まった手に心が痛みながらも、柚芽には慰める言葉は持たず、ただ手当てをすることしか出来なかった。

「すまない……」

「いえ、あたしにはこれくらいしか出来ないから」

「いや、充分だ。それより話が脱線させてしまったな。一応この世界について俺なりに細かく説明してみようと思うが、分からないことがあつたらいつでも言ってくれ」

その言葉に柚芽がお礼を述べると、アデイルは説明するべく口を開いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9525s/>

望んだ非日常（仮）

2011年10月9日01時45分発行